



TITLE:

芥川龍之介と卒業論文‘Young  
Morris’—旧蔵書中のウィリアム・  
モリス関連書籍を手掛かりに—

AUTHOR(S):

澤西, 祐典

---

CITATION:

澤西, 祐典. 芥川龍之介と卒業論文‘Young Morris’—旧蔵書中のウィリアム・モリス関連書籍を手掛かりに—. 京都大学國文學論叢 2015, 34: [1]-[17]

ISSUE DATE:

2015-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/200833>

RIGHT:

# 芥川龍之介と卒業論文 ‘Young Morris’

——旧蔵書中のウィリアム・モリス関連書籍を手掛かりに——

澤西祐典

## 一. はじめに

1916（大正5）年7月、東京帝国大学英吉利文学科を卒業した際、芥川龍之介はウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）を取り上げて卒業論文を書いている。しかし、帝大図書館に保管されていたはずの当の論文は関東大震災の折に焼失、また卒業論文の草稿が岩波書店編集部が存在していたようだ<sup>(1)</sup>が、その所在は現在わからなくなっており、今では芥川の卒業論文の全容を知ることは叶わない。

芥川はウィリアム・モリスのどこに惹かれたのだろうか。モリスといえば、現在では壁紙やインテリアのデザイナーや、機械による量産ではなく手仕事を尊重するアーツ・アンド・クラフツ運動の主導者としての印象が強いが、モリスは実に多芸多才な人物で、「高名な詩人、デザイナー、作家、印刷家、社会主義者、思想家」であり、「歴史・絵画・建築・彫刻・北欧神話にも造詣が深かった」（名古忠行『イギリス思想叢書 11 ウィリアム・モリス』研究社、2004・6）。

芥川のモリスへの関心の在り処を探ろうとする先行論は、膨大な量を誇る芥川研究中であって甚だ僅少である。各論については適宜触れるが、それらの論の多くは、藤井貴志「芥川龍之介とW・モリス『News from Nowhere』」（『日本近代文学』2006・5）の言を借りれば、卒論の現物が焼失しているがために「灰塵を弄び、自らの欲望を投射しつつ思いのままにその虚像を構築」しようとする嫌いがある。また論の中心が、モリスが社会主義思想のプロパガンダとして書いた小説『ユートピアだより（*News from Nowhere*）』と、芥川晩年の作「河童」（『改造』1927・3）との連関に傾きがちであった。卒論の現物が無いことに加え、モリスに関する芥川の発言が殆どないのがその主たる要因と考えられるが、本論では、芥川が所持していたモリス関連書籍を新たな手掛かりとして、芥川が読んだモリス像にいま一度漸近してみたい。

## 二. 卒論提出までの経緯

先行研究と重なる部分が多いが、芥川におけるモリス受容の問題点を明確にするため、卒論執筆の経緯を確認しておく。現存する資料で、芥川がモリスについて初めて言及するのは1914年8月30日付けの井川恭庵て書簡である。芥川は「卒業論文にW. Morrisをかかうと思つてるんで本をとりよせたいんだが戦争でお断りを食つてる 前にたのんだ

本も来るか来ないかわからないさうだ 何より之が悲観だ 事によるとプリラフアエライト ムーブメント全体にするかもわからないが」と記し、社会主義思想家でもあったモリスの関連書籍が、第一次世界大戦の煽りで思うように手に入らず、モリスもその構成員であったラファエル前派に卒論のテーマを広げる可能性を示唆している。

卒業論文の実際の提出は1916年4月末、この手紙が1914年8月30日付けなので、締め切りの約1年8ヶ月前から卒論の準備に取り掛かっていたことがわかる。それから約1年3ヶ月後、卒論提出の約5ヶ月前にあたる1915年12月3日付けの井川恭宛て書簡では、更に具体的な記述がある。

兎に角いろんな事がしたいのでよはる 論文をかく為によむ本ばかりでも可成ある (テキストは別にしても) 題は W. M. as poet と云ふやうな事にして Poems の中に Morris の全精神生活を辿つて行かうと云ふのだが何だかうまく行きさうもない 僕はすべての Personal study はその Gegenstand になる人格の行為とか言辞とかを思想とか感情とかに reduce する事によつて始まると思ふ 云はゞ外面的事象の内面化だ その上でそれにある統一を作つて個々の事実を或纏つた有機体的なものにむすびつける その統一を何によつてつくるかがさし当りの問題だが

芥川は「Gegenstand [論者註・対象]になる人格の行為とか言辞」といった「外面的事象」に注目し、それを「思想とか感情とかに reduce [還元]」する、即ち「内面化」することから出発し、「ある統一」でもって「個々の事実を或纏つた有機体的なものにむすびつけ」たいとしている。つまり「Poems の中に Morris の全精神生活を辿」ろうというのである。手紙から、芥川が「W. M. as poet」、詩人としてのモリスに注目し、「Morris の全精神生活」に迫ろうしていることが窺い知れるが、この文面から実際の卒論の内容を推定するのは早計であろう。何故なら同じ書簡の冒頭で、次のようにあるからだ。

この手紙をかくのが大へんおくれた それはさしせまつた仕事があつたからだ 仕事と云つても論文ではない 論文は一月の一日から手をつけて三月の末までに拵へて四月一杯で清書する予定になつてゐる まだ Text の来ないのがあつて弱つてゐる

つまり、芥川はこの手紙の段階ではまだ論文に着手していなかった。卒論に対してぼんやりとした青写真を抱いているだけであつた。そして実際の卒論の執筆は、芥川の思惑通りには進まなかった。論文着手を目論んでいた年明けから、芥川は多忙を極め、第四次『新思潮』発足の資金づくりの為に同人達と協力して、ロマン・ロラン『トルストイ』を訳し(成瀬正一訳名義で1916年3月、新潮社より刊行)、『新思潮』に載せる原稿「鼻」(1916・2)、「孤独地獄」(同・4)の執筆に加え、塚本文との縁談や趣味の読書、美術鑑賞等と多忙な日々を送った。卒業論文の内容にこそ踏み込まないが、井川恭に宛てた手紙には「論文と原稿とが忙しかつたので大へん御ぶさした」(1916・3・11付け)、「論文で多忙」(1916・3・24付け)、「本をよむ事とかく事とが(論文も)一日の大部分

をしめてゐる。ねてもそんな夢ばかり見る〔中略〕論文をかきあげたらどこかへ行きたい。それまでは駄目(同)、「僕は非常に多忙だ。せつぱつまつてかき出した論文の進歩が遅くてよはりきつてゐる〔中略〕何しろ半分死んだ気になつてかいてゐるいくらかいても百頁にならない論文くらいいやなものはないと思ふ」(1916・4(年月推定))といった文面が見出せる。

時間の制約もあり、卒論は当初の構想から大きな修正を強いられたらしく、久米正雄は芥川の卒論について、「書き初めは William Morris, as Man and Artist だったが、十日ほど過ぎて会ふと、As a poet に縮小し、其五日ほど後になつたら Young Morris と益々退却してゐた。成瀬<sup>ママ</sup>だちと僕はよく芥川のこの軍備縮少を笑つて、Morris in teen. から、よく Morris as an Infant まで退却しなかつたものだと言つたものだ」(「隠れたる一中節の天才」『新潮』1917・10)と冗談を交え、述懐している。卒論の題目は最終的に「Young Morris」(「(東京)帝大英文科卒業論文題目、『英語青年』1916・6・15)に落ち着いたようだ。その内容については、座談会「芥川龍之介研究」(『明治大正文豪研究』新潮社、1936・9)での、同じく久米の証言がある。上司小剣に促され、芥川の卒論に言及した場面である(引用内の括弧は原文ママ、傍線は引用者)。

久米。初めはウキリアム・モリスの詩人としてのモリスからやり出したのです。それから社会改良家としてのモリスに及び、全体のモリスの研究をやる積りだったが、段々時間がなくなつてしまつて……。

上司。むろん、モリスはアナアキズムの詩人だから。

久米。まあ、アナアキスチックの思想から見たものと——あの時分上司さん頻りにユートピア物を書いて居られたけれども、しかし彼の研究そのものはどつちかといへばアズ・ザ・ポーエツトとして——エスシエイテイックの、美的な社会改造家としてばかり考へて居つた。

上司。それは、そうでせうね。

久米。段々論文が縮小して来るので、僕は外にも書いて置いたけれど、一番しまひには——大学で一番先へ出した時はウキリアム・モリス・アズ・マン・ザ・アーテスト(人及び藝術家としてのモリス)それからアズ・ザ・ポーエツト、それからヤング・モリス(若き日のモリス)といふ題で芥川が美文的な伝記を書いて、研究といつたらいか、研究も勿論あるけれども、美文的な文章で、ヤング・モリスといふ題で大学へ出した。僕等ウキリアム・モリス・イン・ヂズ・モリス(重大なモリス)となりやしないかと冷やかしたりしたものです。

ここから少なくとも二つのことがわかる。まず、芥川がモリスを「アナアキスチックの思想」家でなく「詩人として」、「アズ・ザ・ポーエツトとして——エスシエイテイック〔aesthetic 審美的な〕の、美的な社会改造家」と捉えていたこと。それから、提出された卒論が当初の構想からは大きく外れ、「美文的な伝記」であったことの二点である。

芥川のもリス受容の大きな問題点も、概ねこの二つの系統に準ずる。芥川が惹かれた「詩人としてのモリス」とは何か、また芥川はモリスの詩のどこを評価していたのか<sup>(2)</sup>というのが一つ目である。そして二つ目の問いは、実際に提出された卒論は、どのようなものであったのか、である。この二つの問いについて順を追って考察する。

### 三. 日本におけるモリス像

現在、モリスに詩人としての印象は薄い。芥川が卒業論文に取り組んだ大正初期においてはどうだったのか。富田文雄編「日本モリス文献目録」(モリス生誕百年記念協会『モリス記念論集』川瀬書店、1934・10)に拠れば、モリスは1890年代初頭から、文学史各書や文学雑誌の海外時報欄等に詩人として紹介され始め、その後もLafcadio Hearnの1896年から1902年にかけての東京帝国大学英吉利文学科の講義で取り上げられ、上田敏『文藝論集』(春陽堂、1901・12)、島村抱月『滞欧文談』(春陽堂、1906・7)、夏目漱石『文学論』(大倉書店、1907・5)等にも詩人モリスへの言及がある。芥川の卒論執筆時期に近いものを見ても、厨川白村<sup>(3)</sup>『近代文学十講』(大日本図書株式会社、1912・3)や、芥川と親交があった山宮充が訳したW. B.イエーツ『善悪の観念』(東雲堂、1915・3)で詩人モリスに言及があり、モリスの詩人としての側面は十分に伝わっていたようである。

一方、モリスの社会思想に関しては、大正デモクラシーの興隆と共に盛んに紹介されるようになる。富田文雄「文献より見たる日本に於けるモリス」(前掲『モリス記念論集』)は、モリスは「何れの方面を見てみても時代から見て大正時代の後半に於て最も盛に紹介され」、「日本に於てはモリスの社会思想に関連した方面の紹介が最も盛に行はれたこと、次が文学方面であるがこれとても思想上の取扱ひが主となつてゐる様」だと言解を述べている。その思想を喧伝するものとして、中心にあったものこそ*News from Nowhere*である。すなわち、モリスの詩人としての側面は早くから伝わっていたが、大正デモクラシーを経て詩人モリスへの注目は薄れ、代わりに*News from Nowhere*を著した共産主義者、民衆芸術運動家としてのモリス像が形成されてゆく<sup>(4)</sup>。先の上司小剣のように、芥川のもリス受容を社会主義思想に引き寄せて把握しようとする動き<sup>(5)</sup>は、いわば大正後期以降に形成されたモリス像からの逆照射で、*News from Nowhere*を中心に芥川のもリス受容を読み解こうとする姿勢も、同様の陥穽に陥っているといえよう。

では、芥川が読んだ詩人モリスはどのようなものだったのか。芥川と詩人モリスについて考察したものとして、島田謹二『『傀儡師』前後のイギリス的・ロシア的材源』(『日本における外国文学(上)』第三章、朝日新聞社、1975・12)がある。島田は、芥川は「詩人としてのモリスをよく読」んだが、島田自身の学生時代の経験から「かれはあんまりたくさん読んでいなかった」、「読んでも必ずしもよくわからなかった」と推断した。また芥川は「散文の詩人モリス」から「中世趣味」の手口あるいは取り扱い方を学んだとして、モリスの詩が平安朝ものの淵源であるとし、特に「偷盗」(『中央公論』1917・4、7)は、モリスの代表詩集『地上楽園*The Earthly Paradise*』中で最も有名な詩“The Lovers of Gudrun”(「グールドレンの恋人たち」)の翻案であると指摘している。島田論はその根拠の

薄さからしばしば批判されてきたが、次章以降では島田論を一つの指針としながら、芥川の所持していたモリス関連書籍を手掛かりに、芥川とモリスの関わりを明らかにしたい。

#### 四. 旧蔵書におけるモリスの著作から

日本近代文学館に所蔵されている芥川龍之介の旧蔵書<sup>(6)</sup>中のウィリアム・モリスの著作は、以下の8冊である。モリスの代表作 *The Earthly Paradise* (London, Longmans, 1905) 全四巻、初期詩集 *Poems by the Way & Love is Enough* (London, Longmans, 1912)、初期作品集 *Prose and Poetry (1856-1870)* (London, Oxford University, 1913)、小説 *The Story of Glittering Plain or the Land of Living Men* (Pocket Edition 版, London, Longmans, 1913)、そして *News from Nowhere or an Epoch of Rest* (Pocket Edition 版, London, Longmans, 1914) である。このうち *The Story of Glittering Plain* の最終頁には「April 19th '15 Tabata」という書込みがあり、読了日と考えられる。また、*News from Nowhere* の表見返しには「R. Akutagawa」という(本書唯一の)書込みがあった。その他の書籍に対する書込みに関しては随時報告する。

この中で詩集を含むのは *Prose and Poetry (1856-1870)*、*The Earthly Paradise*、*Poems by the Way & Love is Enough* の三タイトルである。*Prose and Poetry (1856-1870)* にはモリスの処女詩集“The Defence of Guenevere”(1858)と出世作である第二詩集“The Life and Death of Jason”(1867)が含まれる。*Poems by the Way & Love is Enough* には、“The Earthly Paradise”(1868-70)と同時期に執筆された“Love is Enough”(1873)と、晩年の詩集“Poems by the Way”(1891)が収められている。

芥川がそれらをどれほど読んでいたのか。島田は「かれはあまりたくさん読んでいなかった」、「たくさん読んでないとすると、読んだものは何か?」、「私はごく有名なものはきっと読んでいたという意見であります」とした。その「ごく有名なもの」として“The Lovers of Gudrun”を挙げ、「偷盗」と比較した。

さて、芥川の所持していた *The Earthly Paradise* はアンカット本であり、本の状態から、芥川が読んだものと読んでないものがわかる<sup>(7)</sup>。本の状態を確認したところ、非常に多くの箇所が未裁断のままだった。島田の「あまりたくさん読んでいなかった」という推測は、この *The Earthly Paradise* に関しては当たっていたことになる(しかし、裁断されていない詩の中には島田が挙げた「グードルンの恋人たち」も含まれていた)。

未裁断の箇所があり、通読できない状態にあったのは以下の14作品。“The Proud King”、“The Story of Cupid and Psyche”、“The Love of Alcestis”、“The Lady of the Land”、“The Son of Croesus”、“The Watching of the Falcon”、“Pygmalion and the Image”、“Ogier the Dane”、“The Land East of the Sun”、“The Story of Rhodope”、“The Lovers of Gudrun”、“The Fostering of Aslaug”、“Bellerophon at Argos”、“Bellerophon in Lycia”。*The Earthly Paradise* には“Prologue”を含めて25篇の物語詩があるが、その大半が読まれていない状態<sup>(8)</sup>であった。

反対に通読できる状態だったのは、Vol.1 では Prologue である “The Wanderers”、“Atlanta's Race”、“The Man Born to be King”、“The Doom of King's Acrisius” の 4 作、Vol.2 では “The Writing on the Image” の 1 作、Vol.3 では “The Death of Paris”、“The Story of Acontius and Cydippe”、“The Man Who Never Laughed Again” の 3 作品、Vol.4 は “The Golden Apples”、“The Ring Given to Venus”、“The Hill of Venus” の 3 作品の計 11 作品で、これらに関しては芥川が通読した可能性がある。

何らかの書き込みがあった作品は “The Wanderers”、“The Land East of The Sun and West of the Moon”、“The Hill of Venus” の 3 作品である。このうち “The Land East of The Sun and West of the Moon” は後半に未裁断の箇所がある為、途中で読み止めたと推測できる<sup>(9)</sup>。

また *Poems by the Way & Love is Enough* もアンカット本であり、未裁断の部分があった。裁断されていない箇所は “Love is Enough” (223 頁以降) に集中しており、本書を芥川が通読していなかったことは明白である<sup>(10)</sup>。

最後に *Prose and Poetry (1856-1870)* だが、製本されているため本の状態からは読書状況がわからないが、小説 “The Hollow Land” と、詩作 “The Defence of Guenevere”、“The Chapel in Lyonesse”、“Sir Peter Harpdon's End” に線や括弧等の書き込みがあった。

以上のような旧蔵書の状態から、芥川がモリスの詩作を網羅的に読んでいなかった様子が浮かび上がってくる。とはいえ、卒業論文で詩人モリスを取り上げようとした以上、芥川はモリスの詩に特別な魅力を感じていた筈である。モリスの詩に施された書込みを辿ることで、芥川の関心を追ってみる (以下、引用中の線は書き込みを再現したもの)。

[“Prologue” *The Earthly Paradise Vol.1* 10 頁 1-4 行目：赤ペン下線]

It was a bright September afternoon,  
The parched-up beech trees would be yellowing soon;  
The yellow flowers grown deeper with the sun  
Were letting fall their petals one by one;

[“The Land East of the Sun and West of the Moon”]

*The Earthly Paradise Vol.3* 45 頁 1-9 行目：黒鉛筆、左脇に縦線]

Nigher than where her un-kissed feet  
Had kissed the clover-blossoms sweet,  
The snowy swan-skin lay cast down.  
His heart thought, “She will get her gone  
E'en as she came, unless I take  
This snow-white thing for her sweet sake;  
Then whether death or life shall be,  
She needs must speak one word to me  
Before I die.”

[“The Hill of Venus” *The Earthly Paradise Vol.4* 370 頁 6 行目 : 赤ペン下線]

But the third thought at last, unnamed for long,  
Bloomed, a weak flower of hope within his heart;  
And by its side unrest grew bitter strong,  
And, though his lips said not the word, "Depart;"  
Yet would he murmur: "Hopeless fair thou art!  
Is there no love amid earth's sorrowing folk?"  
So glared the dreadful dawn — and thus it broke.—

[同前 375 頁 8-10 行目 : 赤ペン下線]

Again he looked about: the sun was bright,  
And leafless were the trees of that lone place,  
Last seen by him amid the storm's wild light;  
He passed his hand across his haggard face,  
And touched his brow; and therefrom did he raise,  
Unwittingly, a strange-wrought golden crown,  
Mingled with roses, faded now and brown.

[“The Hollow Land” *Prose and Poetry(1856-1870)* 131 頁 14-17 行目 : 赤ペン下線]

“Queen Mary's crown was gold,  
King Joseph's crown was red,  
But Jesus' crown was diamond  
That lit up all the bed  
      Mariae Virginis”

[同前 136 頁 14-17 行目 : 赤ペン下線]

…… albeit the king feared somewhat, because every third  
man you met in the streets had a blue cross on his  
shoulder, and some likeness of a lily, cut out or painted,  
stuck in his hat; and this blue cross and lily were the  
bearings of our house, called "De Liliis."

[“The Chapel in Lyons” *Prose and Poetry(1856-1870)*

217 頁 1-4 行目 : 黒鉛筆、右脇縦線]

Within the tress of her hair  
That shineth gloriously,  
Thinly outspread in the clear air  
Against the jasper sea.



引用した箇所から明らかなように、書込みは象徴的な色彩美が際立つ部分に施されている。それは唯美主義を表明するラファエル前派全体を貫く特徴<sup>(11)</sup>ともいえるが、モリスの詩の鮮烈な色遣いに敏感に反応している様相は、久米が「エスシエイテック」という評語を使って、芥川のモリス像を言い表した点とも符合する。芥川が詩人モリスのどこに惹かれていたのか、という問いの答えとして、まずはモリスの詩の鮮烈な色遣い、色彩美を挙げることができよう。

次に、モリスの詩の内容からも考察を加えておきたい。例えばモリスの代表作 *The Earthly Paradise* 中、芥川が読んだ可能性が高い“*The Writing on the Image*”と“*The Man Who Never Laughed Again*”の梗概は次の通りである。前者は、ローマの街角にラテン語で「ここを打て」という言葉が刻まれた木像が立っており、シチリアから来た貧しい学者がその意味に気付き、昼間に像の手の影がなぞった場所を夜が訪れるのを待って掘り起こす。そこには地下へ下る螺旋階段があり、奥へ進むとランプに照らされた大広間に行き着く。学者は部屋にあった数多の宝石や金品を漁り、最後に床の上にあった見事な緑の宝玉を取ろうとするが、その玉を掘り出すにしたがって、弓矢が徐々に引かれる罠が仕掛けられており、遂には矢が大広間を照らすランプ目掛けて放たれる。明かりを失った学者は帰り道がわからなくなり、そのまま死に絶える。そして、明け方近く街を襲った嵐によって、広場にあった木像もこなごなに壊れてしまう。これは、『黄金伝説』と併せて度々芥川によって言及される『ゲスタ・ロマノールム』を典拠とした物語詩である。また、“*The Man Who Never Laughed Again*”は、元は富豪の子であったが落ちぶれてしまった青年 *Bharam* の物語で、彼はとある扉を開けてはならぬという戒めを、二度まで破ったため、安息の地を得られぬ呪いに掛かり、死ぬまで各地を放浪しなければならぬ運命となる。元は富豪であった点や戒めとそれを破った罰というモチーフは「杜子春」にも通じる部分があり、芥川の「MYSTERIOUS な話し」（1914・8・30 付け井川恭宛て書簡）への興味を満たしたと察せられる。

そもそも *The Earthly Paradise* は、ヨーロッパにおける黒死病時代に、ノルウェーの船乗りたちが地上楽園を夢見て出航し、「彼らが聞いたこともないとある西方の地」（川端康雄・志田均・永江敦訳、フィリップ・ヘンダーソン『ウィリアム・モリス伝』晶文社、1990・3）に到着するところから始まる（プロローグ）。そこには、古代ギリシアの民が古代の生活を保ったまま生き残っていた。双方がお互いの物語を知りたがり、三月から翌年二月までの十二ヶ月にわたり、各月二つの物語が語られる。それゆえ本作は「十二篇がギリシア物語、残りの十二篇は、フランスとドイツのロマンスや北欧アイスランド・サガによって西ヨーロッパに流布している物語、また東洋の物語」（同）になっている。つまり *The Earthly Paradise* の本編二十四篇は、古今東西の伝説や昔話の再話と言え、芥川は W. B. イエーツやシング、アナトール・フランスらと同じように昔話や伝説を提示してみせるウィリアム・モリスに惹かれていったのであろう<sup>(12)</sup>。

複数の線が書き込まれている“*The Hill of Venus*（ウェヌスの丘）”はさらに芥川好みの作品と言える。この詩はタンホイザー伝説が基になっており、二月の二番目の詩、つ

まり *The Earthly Paradise* の最後を飾る作品である。主人公の **Walter** はウェヌスの丘に至り、幸福と歓喜の生活を送るが、放蕩生活に良心の呵責を覚え、ローマ法王のもとを訪れて、自分の罪を清めてもらおうとする。しかし法王は、お前に望みを掛けるのは、自分の枯れた杖に実がなり、花が咲くのを期待するのと同様望みの薄いことだとして、**Walter** を拒絶しウェヌスの丘に永遠に住むよう言い渡す。**Walter** は失意のうちにウェヌスの丘へ帰る。

その翌日、法王が **Walter** のことを悔いている場面からこの詩の最後（402 頁 5 行目より 403 頁 12 行目）まで、文章脇に赤ペンで縦線が引かれている。庭園で法王が脇に置いていた杖に再び手を伸ばそうとしたところ、杖から青葉が生え、花が咲く。その花には、天国の無限の時が育んだ果実が実っていた。神が **Walter** を許したのである。法王はそれを目撃し、何人もかつて見たことのないほどの喜びを顔に湛えて息絶える。

ここには「きりしとほろ上人伝」（『新小説』1919・3、5）や「じゅりあの・吉助」（『新小説』1919・9）、「往生絵巻」（『国粹』1921・4）といった芥川作品を髣髴とさせるモチーフがある。どれも臨終に際して超自然的に咲く花が、神の許しや往生の証として登場しており、“The Hill of Venus” と共通している。勿論これらは、作品の直接的な典拠とされる **Jacobus de Voragine** 『黄金伝説』の「聖クリストファー伝」、アナトール・フランスの「聖母の軽業師」、『今昔物語集卷十九第十四』の「讃岐国多度群五位開法師即出家語」の記述にそれぞれ拠っていると考えられる。とはいえ、“The Hill of Venus” に強く惹かれていたことは書籍の状態からも明らかであり、杖に青葉が芽吹き花咲く場面に線が引かれていることは、超自然的に顕れる神の許しへの芥川の嗜好が、すでにこの時に芽生えていたことを示している。言い換えれば、古今東西の伝説や昔話の再話を試みたモリスの詩は、芥川の「MYSTERIOUS な話し」への興味を拡充させると共に、芥川の嗜好を研ぎすまし、モリスの読書体験は自作の重要なモチーフに繋がる雛型体験だったといえる。

## 五. モリス研究を通して

旧蔵書中のモリスの著作を手掛かりに、芥川の関心の在り処を探ってきたが、ここでモリスの著作以外の関連書籍も見ておきたい。管見の限り、旧蔵書中の関連書籍は、① **H. A. Beers** 著 *A History of English Romanticism in the Nineteenth Century* (New York, Holt, [Pref.1901])、② **A. Clutton-Brock** 著 *William Morris : His Work and Influence* (London, Williams, 1914)、③ **J. W. Mackail** 著 *The Life of William Morris Vol.I & II* (London, Longmans, 1912)、④ **William Morris** 訳 *Old French Romances* (London, Allen, 1914)、⑤ **H. Halliday Sparling** 著 *The Kelmscott Press and William Morris Master-Craftsman* (London, Macmillan, 1924)、⑥ **Ford Madox Hueffer** 著 *The Pre-Raphaelite Brotherhood ; A Critical Monograph* (London, Duckwoth, [n.d.])である<sup>(13)</sup>。

このうち、最後の⑥ *The Pre-Raphaelite Brotherhood* には「July 2<sup>nd</sup> '24」という日付の書込みがあり、卒論執筆後に読了したと推察される。また⑤ **Sparling** 著 *The Kelmscott Press*

and William Morris Master-Craftsman も出版年から考えて、今回は考察の対象としなかった。モリスが英訳した④ *Old French Romances* には「藪の中」(『新潮』1922・1)の典拠の一つとされる「ポンチュール伯の娘」の英訳“The History of Over Sea”が含まれているが、本書への書込みは確認できなかった。

これらのうち、① H. A. Beers 著 *A History of English Romanticism in the Nineteenth Century* (New York, Holt, [Pref.1901])と② A. Clutton-Brock 著 *William Morris: His Work and Influence* には具体的な書込みがあり、卒論研究に用立てたと推察される。それぞれ①の“Pre-Raphaelites”の章(282-351頁)に「モリス論」(316頁20行目:左脇・黒鉛筆)、「ロセツテとモリスの相違点」(318頁7行目:左脇・黒鉛筆)、「モリスとスコット」(320頁18行目:左脇・黒鉛筆)という書き込みが、②の“Morris as a Romantic Poet”の章には「This maybe compare with Tennyson」や「morris dreams the old-story」(共に84頁欄外)といった書込み<sup>(14)</sup>が確認できる。

①の“Pre-Raphaelites”の章では、ラファエル前派の詩人としてロセツティ、モリス、それからスウィンバーンが扱われている。書き込みや書籍の所持<sup>(15)</sup>を見ると、芥川はスウィンバーンにも興味を寄せていたようで、卒論を「プリラファエライト ムーブメント全体にするかもわからないが」と述べた時、おそらくスウィンバーンの詩もその中に数えられていたのであろう。

本書には上記書込み以外にも、多数の線が引かれ、芥川の勉強ぶりが窺えるが、その中に芥川のモリス理解を示す重要な箇所がある。長くなるので引用は控えるが、処女詩集“The Defence of Guenevere and Other Poems”の分析が、テニスンと比較される形で展開されている部分で、当該箇所線が書込まれている(325頁2-13行目:黄色鉛筆右脇縦線、同頁15-16行目:黒鉛筆右脇縦線)。著者のBeersは、William Bell Scottの言を引きながら、19世紀の感傷的な復古趣味と異なり、モリスが全く新しい方法で中世の精神を表現しているとし、モリスの詩が野蛮な時代における詩情に、力強く、鮮烈な生々しさを与えたとする。それはテニスンが描いたような理想化された穏やかな中世ではなく、猛々しい中世だったとする<sup>(16)</sup>。

ここに、芥川の中学生時代の文章「義仲論」(『校友会雑誌』1910・2・10)との類似を見出すことは容易い。白井吉見『木曾義仲』をめぐって(『現代日本文学大系』1968・8)や伊豆俊彦「芥川文学の原点」(『日本文学』1973・7)が明らかにしたように、「義仲論」には「野生の愛児」であり、「情熱の愛児」であり、「革命の健児」であり、「極めて大胆にして、しかも極めて性急」であった「義仲」像に対する憧憬が露骨に描かれている。そこに、モリスの中世観と共鳴する芥川の資質が窺える。加えて、モリスの中世観として、ここで論じられている特徴は、そのまま芥川の『今昔物語』の鑑賞のあり方と繋がってはいないだろうか。

「今昔物語鑑賞」(『日本文学講座』第六巻、新潮社、1927・4)で、芥川は『今昔物語』の魅力として「美しい生ま々々しさ」を挙げ、「この生ま々々しさは、本朝の部には一層野蛮に輝いてゐる。一層野蛮に?——僕はやつと『今昔物語』の本来の面目を発見した。『今昔物語』の芸術的生命は生ま々々しさだけには終つてゐない。それは紅毛人の言葉

を借りれば、brutality（野性）の美しさである。或は優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさである」と述べる。『今昔物語』に心酔したのは本人の資質の問題が大きいと思われるが、モリス論の執筆は彼自身の方向性をより明確に自覚する契機となったのではなからうか。

また① H. A. Beers 著 *A History of English Romanticism in the Nineteenth Century* の前巻にあたる *A History of English Romanticism in the Eighteenth Century* (New York, Holt, [Pref. 1898]) の第一章 “The Subject Defend” にも多量の書込みがある。Romanticism という語の定義を巡り、“The essence of romance.” he writes. “is mystery” (11 頁 23-24 行目：赤ペン二重下線) という一文や、“every good piece of romantic art is a classic in the making. Decried by the classicists of to-day, for its failure to observe traditions, it will be used by the classicists of the future as a pattern to which new artists must conform.” (11 頁 4-8 行目：黒鉛筆右脇縦線) という、後の芥川の「僕と同時代の作家達は、より人間らしい忠直卿や俊寛僧都を描いて居る。然しそれらは、遅かれ早かれ「よりより人間らしい」忠直卿や俊寛僧都に改められるであらう」(「文藝雑談」、『文芸春秋』1927・1) という発言を想起させる主張が展開されている。勿論、芥川自身はロマン主義を表明したことはないが、「鼻」、「孤独地獄」、「羅生門」、「芋粥」と創作を重ねていく芥川にとって、卒業論文で作風の類似したモリスを研究したことは、創作を推し進めていく論理的な後ろ盾を得る行為でもあったのではないだろうか。

## 六. 実際に提出された卒業論文

さて、モリス関連書籍から芥川とモリス受容を追ってきたが、ここで提出された卒論が「美文的な伝記」だったという久米の証言に戻ると、実際の卒論執筆において芥川が最も参考にしたのは③ J. W. Mackail の伝記 *The Life of William Morris Vol. I* ではないかと推察される。

本書にも多量の書込み線が散見されるが、その多くは 40 頁までの部分に集中している<sup>(17)</sup>。年代で言えば 1853 年、モリス 20 歳前後の部分までで、読書家であった話やよく森を散歩していた等の逸話が書かれている。もし仮に卒業論文の範囲がここまでであったとすれば、「書き初めは William Morris, as Man and Artist だったが、十日ほど過ぎて会ふと、As a poet に縮小し、其五日ほど後になつたら Young Morris と益々退却してゐた。成瀬だちと僕らはよく芥川のこの軍備縮少を笑つて、Morris in teen. から、よく Morris as an Infant まで退却しなかつたものだと言つたものだ」(前掲) という久米の冗談は芥川の卒業論文の現状を精確になぞった皮肉だったことになる。

加えて芥川の卒論については、次のような証言を発見した。大阪市立大学図書館にある新村出文庫に所蔵されている加田哲二『ウキリアム・モリス』(岩波書店、1924・4) の見返しに、新村出が本書を落手した経緯を記している。そこには、

一九二一年(大正十年)在英のをりおくればせにモーリスの工藝にあてられて帰り

し後いくたびかをりにふれて彼レの人物と□□〔二字不明〕とをたゝへしことぞ、昭和の二年（一九二七）夏高野山上の講演においてモーリスを説きしをり、知人の参考書に本書を薦めしが、下山して『書物の趣味』創刊号に光悦と対照しつつ、そのケルムスコット版をたたへたりしことあり、越えて二年、この四月東京にをりしをり、偶々菊池寛氏と、岩波茂雄氏と、故人芥川龍之介氏のモーリス研究の遺稿のことを質しことありしが、かゝる因縁にて岩波氏より加賀氏の本旧著を寄贈せらるゝこととなりぬ／昭和四年（一九二九）四月二十六日先批通忌の夜に／新村出

と書かれている。「故人芥川龍之介氏のモーリス研究の遺稿」について尋ね、その返答として加田哲二『ウキリアム・モリス』が贈られたことになる。本書の内容を検めると、前半部が卒論の種本と目される J. W. Mackail の *The Life of William Morris* の要約となっている。芥川の旧蔵書の *The Life of William Morris Vol.1* の傍線箇所とこの加田本を比較すると（偶然であろうが）旧蔵書の傍線箇所の殆んどが加田本で訳出されている。

芥川の親友である菊池寛と、芥川の子集を出した岩波書店の社長である岩波茂雄は、その立場から芥川の卒論草稿に目を通していたと考えられ、また岩波茂雄は、同じく岩波書店から出版された加田の本のことを把握していたと考えるのが自然であろう。その為、新村に「芥川龍之介氏のモーリス研究の遺稿」について訊ねられた際、加田本を後に贈ったのであろう。現物がいないため推測の域を出ないが、「シング紹介」（『新思潮』1914・8）の多くを Maurice Bourgeois の *John Millington Synge and the Irish Theatre* (London, Constable, 1913) から引き写し<sup>(18)</sup>、Dorothy Scarborough 著 *The Supernatural in Modern English Fiction* (New York, Putnam, 1917) の一節を、あたかも自説の様に「近頃の幽霊」（『新家庭』1921・1）で語った<sup>(19)</sup> 芥川であれば、卒論が J. W. Mackail の *The Life of William Morris Vol.1* の引き写しであったとしても不思議ではない。

時系列に沿って整理すれば、芥川が卒論を提出した八年後、それとは無関係に加田本が出版され、芥川の没後、全集編集の過程で、加田本との内容の重複から、芥川の卒論が J. W. Mackail の *The Life of William Morris Vol.1* の引き写しであったことが判明し、全集への卒論の草稿の掲載が見送られた（注（1）参照）と推察される。全集への掲載見送りは芥川の名誉の為でもあったのだろう。

## 七. 一大橋梁としてのモリス

さて、モリスが最初の妻ジェーンを巡ってロセッティと三角関係にあったことは有名である。この騒動は *The Earthly Paradises* 執筆時期のことで、依然として妻を愛していたモリスを捨て、ジェーンはロセッティを選ぶ。松澤（注（5）参照）が指摘するように「それは、ちょうど芥川が、初恋の人吉田弥生との不本意な離別、そして弥生が陸軍中尉金田一光男と結婚して去っていく時期（大正三、四年）の芥川の心境と重ねてみることができる」。晩年の大熊信行宛て書簡（注（2）参照）で芥川が「小生は詩人モリス、——殊に *Love is Enough* の詩人モリスの心事を忖度し、同情する所少なからず」というのも、

指摘がある通り、モリスの失恋を踏まえてなされているのであろう。“Love is Enough”は、*The Earthly Paradise* と同時期に創作されたモリスの詩のタイトルでもある。この作品の梗概をごく簡単に述べると、夢で見た愛する人を求め、王が全てを捨て旅に出るというものである。旧蔵書にある *Poems by the Way & Love is Enough* の “Love is Enough” の部分が通読できない状態であったことは既に述べたが、作品の冒頭近くにある詩は、芥川も目にしたことであろう。登場人物の一人である「MUSIC」曰く、

LOVE IS ENOUGH: though the World be a-waning  
And the woods have no voice but the voice of complainings,  
Though the sky be too dark for dim eyes to discover  
The gold-cups and daisies fair blooming thereunder,  
Though the hills be held shadows, and the sea a dark wonder,  
And this day draw a veil over all deeds passed over,  
Yet their hands shall not tremble, their feet shall not falter ;  
The void shall not weary, the fear shall not alter  
These lips and these eyes of the loved and the lover.

愛さえあれば、世界がどれほど悲惨になっても恋人達は乗り越えることができる、という主旨が歌われている。作品中、「MUSIC」は「LOVE IS ENOUGH」という節から始まる詩を、挿入歌の如く繰り返し詠み上げる。執拗なまでのその様は、モリスの悲鳴のようにも感じられ、芥川が「小生は詩人モリス、——殊に *Love is Enough* の詩人モリスの心事を付度し、同情する所少なからず」と述べるのも肯ける。芥川の失恋の傷は時とともに癒えたに違いないが、芥川の中のモリスの姿は「*Love is Enough* の詩人」として記憶され続けたのではないだろうか。

本論では触れる余裕がなかったが、ウィリアム・モリスはカクストン訳『黄金伝説』の装幀者でもある（芥川が愛読したカクストン訳『黄金伝説』は、このケルムスコット・プレス版ではないが）。また芥川の自著への拘りは、装幀家モリスからの影響も考える必要があろう。こうして見ると、モリスを卒業論文として選んだことは、多岐にわたり後年の芥川へ影響している。芥川は大熊宛て書簡で「詩人、兼小説家兼画家兼工芸美術家兼社会主義者として立てるモリスは前世紀後半の一大橋梁と存候」と記しているが、立ち戻ることは少なかったかもしれないにせよ、モリスは芥川にとってまさに「一大橋梁」だったに違いない。

[付記]

著作の引用に際しては適宜、旧字は新字に改め、ルビは省略した。また本文中の芥川の著作の引用は『芥川龍之介全集』（全24巻、岩波書店、第2刷、2007・1－2008・12）に拠った。

[注]

- (1) 『芥川龍之介全集月報 第八号』(岩波書店、1929・2)の佐々木茂索「編纂余言」に「それから、大学卒業論文の草稿「ウキリアム・モリス」は一旦組版までしたが、都合で除却した」とある。
- (2) 社会主義者としてのモリス像を退け、詩人としてモリスを評価する態度は、芥川の短い生涯にあって一貫している。芥川は大熊信行に『社会思想家としてのラスキンとモリス』(新潮社、1927・2)の献本の礼と感想を述べた書簡(同・2・17付け)でモリスを「詩人、兼小説家兼画家兼工芸美術家兼社会主義者として立てるモリス」と記している。この「詩人」と「兼小説家兼画家兼工芸美術家兼社会主義者」の間に付された「、〔読点〕」は看過すべきでない。続けて「老年のモリスの社会主義運動に加はり、いろいろ不快な目に遭ひし事は如何にも人生落莫の感有之候。(そは勿論高著の問題外に属し候へども。)小生は詩人モリス、——殊に Love is Enough の詩人モリスの心事を付度し、同情する所少なからず、モリスは便宜上の国家社会主義者たるのみならず、便宜上の共産主義者たりしを思ふこと屢々に御座候」とも綴っている。
- (3) 厨川白村に対する芥川の発言は幾つか散見される。海外に詩作に対して「僕に上田敏と厨川白村とを一丸にした語学の素養を与へたとしても、果して彼等の血肉を啖ひ得たかどうかは疑問である」(「僻見」、『女性改造』1924・3)とする発言や、1921年3月7日付け恒藤恭宛て書簡「成瀬は洋行した 洋行きへすれば偉くなると思つてゐるのだ 厨川白村の論文なぞ仕方がないぢやないかこちらでは皆軽蔑している」がある。語学的素養は認めながら、学者としては尊敬していなかったようだ。後者で言及されている論文は、『象牙の塔を出て』(福永書店、1920・6)のことではないかと考えられるが、当書にもウィリアム・モリスについての言及がある。
- (4) 詩人モリスから思想家モリスへの移行の嚆矢として、本間久雄「生活の芸術化・芸術の生活化」(『新小説』、1917・5)が挙げられる。その冒頭部分「ウィリアム・モリスはこゝに改めていふまでもなく、主としてかのロセテやバアンジョオンスなどのラファエル前派の詩人・芸術家として夙に我が国にも知られてゐた。しかし、彼れの芸術家としての特色は、彼れが「社会主義・その発達と効果」の著者である一個熱烈な社会主義者であるところにあつた。言葉を換へていへば社会主義の立場から芸術を解釈して、芸術と民衆生活との関係を明かにしたところにあつた」という発言は、前述のごとき文脈で発せられている。この本間の「生活の芸術化・芸術の生活化」論に対して、芥川は「あの新小説で、本間久雄の評論(モリス論)をよんで悲観しちまつた ああなつちや救はれない。救はれない以上に気の毒でしょうがない」(1917・5・7付け松岡譲宛て書簡)と反駁を加えている。「芥川が過剰に反応し消去せずいられたのは、〈詩人〉の抑圧と引き換えにモリスを政治的読解の下に侵略するこの種の言説だった」とする藤井論(前掲)の主張は首肯できる。
- (5) 座談会「芥川龍之介研究」(前掲)での上司小剣の発言や五島茂・安藤一郎の対談(附録「人間と自然の美しさ」、『世界の名著 41 ラスキンのモリス』中央公論社、1971・3)、窪川鶴次郎「芥川思想について」(『國文学』1957・3)、松澤信祐「芥川とウィリアム・モリス」(『新時代の芥川龍之介』洋々社、1999・11)が挙げられる。
- (6) 経緯は『芥川龍之介文庫目録 日本近代文学館所蔵資料目録 2』(日本近代文学館、1977・7)に詳しい。
- (7) 勿論、芥川がこの本以外で *The Earthly Paradise* を読んだ可能性は排除できない。しかし、例

えば第三巻の目次の“The Land East of the Sun and West of the Moon (太陽の東、月の西)”の脇には、「Hagoromo」という書き込みがある。この“The Land East ~”という物語詩は、父親の牧場が荒らされた犯人探しのために、三人兄弟が順に見張りに付き、兄二人は失敗するが、末弟の John が見張っていると、七羽の白鳥が飛んできて、その羽衣を脱いで美しい人間の姿になる。ジョンはそのうちの一人に心を奪われ、羽衣を盗んで帰れなくしてしまう、というふうに話が進む。これは冒頭部分の梗概に過ぎないが、いわゆる羽衣伝説の再話である。

「Hagoromo」という書き込みは、芥川が“The Land East ~”を読み進めて、羽衣伝説の再話であるという事実気付いた際の書込みと考えられる。つまり、芥川がこの本で“The Land East ~”を初めて読んだことが推測される。

- (8) 裁断されていない箇所の詳細は次の通り。まず Vol.1 の“The Proud King”は 313-316 頁分が未裁断。Vol.2 に移って“The Story of Cupid and Psyche”は 57-60、73-76、77-80 頁、“The Love of Alcestis”は 137-140 頁、“The Lady of the Land”は 157-160、169-172 頁、“The Son of Croesus”は 185-188、189-192 頁、“The Watching of the Falcon”は 201-204、205-208 頁、“Pygmalion and the Image”は 249-252、253-256 頁、“Ogier the Dane”は 274-275、297-300 頁。Vol.3 では“The Land East of the Sun”は 89-92、137-140 頁、“The Story of Rhodope”の 285-288 頁、“The Lovers of Gudrun”の 329-332、333-336、425-428、429-432 頁。Vol.4 では 25-28 頁 (25 頁が The Golden Apples の最後の頁、26-28 頁が December の序詞にあたる)、“The Fostering of Aslaug”の 29-32、41-44、45-48、57-60、61-64 頁、“Bellerophon at Argos”の 89-92、93-96、121-124、125-128、153-156 頁、“Bellerophon in Lycia”の 253-256、281-284、285-288、297-300、301-304、313-316、329-332、333-336 頁が未裁断であった。
- (9) 89-92 頁と 137-140 頁が未裁断。
- (10) “Love is Enough” (223-343 頁)の 241 頁より先は殆どが未裁断であった。未裁断の部分は 241-248、249-256、257-264、265-272、273-280、281-288、289-296、297-304、305-312、313-320、321-328、329-336、337-340、341-344 頁 (344 頁は白紙)であった。
- (11) 篠永佳代子「芥川文学形成期の一問題」(『近代文学 研究と資料』1979・4)は、この書簡を手掛かりに、ラファエル前派運動の絵画芸術にまで視野を広げ、「理想主義的でしかも美的世界を合せもつ」ラファエル前派の芸術が芥川に与えた影響の大きさを説いた。
- (12) 鈴木暁世「芥川龍之介「シング紹介」論」(『日本近代文学』2008・5、後に『越境する想像力』大阪大学出版会、2014・2 収録)によって提出された芥川の「放浪者」への憧憬とモリスの諸作品も無縁ではなかろう。そう考えるとモリスの作品と「偷盗」の影響関係は島田が述べているが、「芋粥」(『新小説』1916・9)もモリス作品の強い影響下にあったのではないかと考えられる。「芋粥」では五位が藤原利仁に連れられて、敦賀へ着くまでの旅程が作品の半分近くを占めるが、モリスの作品もユートピアを主題にした作品が多いため、放浪の旅が執拗につづく。大量の芋粥が作られる利仁の館は、五位にとって一種のユートピアと捉えることもでき、その喪失が主題でもある。作品の発表時期からしても、モリスの諸作品との連関が問われる必要があるが、他日を期したい。
- (13) 芥川の旧蔵書中には他にも Lafcadio Hearn の *Appreciations of Poetry* (New York, Dodd, c1916) と Gilbert Keith Chesterton の *The Victorian Age in Literature* (London, Williams, [n.d.]) に詩人とし



でのモリスへの言及が見出せたが、前者は発売が 1916 年であり、卒論執筆に役立てたか定かでないので取り扱わなかった（確認した範囲では、書き込みなし）。後者については大量の下線、書き込みが確認できたが、その中心は Browning についてだったので、今回は対象外とした。

- (14) その他にも本書には 25 頁 17-28 行目 (“Introduction”) 脇に黒インク縦線、48 頁 1-28 行目と 49 頁 8-15 行目 (“The Influence of Rossetti” の章) 脇にそれぞれ黒インク縦線、83 頁 14-17 行目 (“Morris as a Romantic Poet” の章) 脇に赤鉛筆縦線、84 頁 5-11 行目 (“Morris as a Romantic Poet” の章) 脇に赤鉛筆縦線、197 頁 9-15 行目 (“The Prose Romance”) 脇にも黒ペンで縦線の書込みがあった。
- (15) 旧蔵書にある Swinburne の著書は *Poems & Ballads Vol.I & Vol.II* (London, Heinemann, 1917)、*Selections from the Poetical Works* (New York, Crowell, c1884)、*Tristram of Lyonesse* (London, Heinemann, 1917) で、このうち、*Selections from the Poetical Works* に多量の下線がある。またアンカット本であるラフカディオ・ハーンの講義録 *Appreciations of Poetry* を見ると、William Morris、Rossetti に加え、Swinburne の詩について論じた章はすべてカットされ、読める状態になっていた。
- (16) ② *William Morris : His Work and Influence* にもモリスの中世観に理解を示す書込みが見られる。本書の 84 頁 5-11 行目 (“Morris as a Romantic Poet” の章) 脇に赤鉛筆縦線が引かれ、その縦線に向けて矢印が記され、上部余白に「This maybe compare with Tennyson」と黒ペンで書かれ、頁下余白には同じく黒ペンで「morris dreams the old-story」と書かれている。ここにもテニスンが中世の出来事を昔物語として描いたのに対し、モリスがアーサー王伝説の登場人物を生きた人間として捉えており、彼らについて書くにあたり、彼らの生きた世界をも同時に創出しなければならなかったことが論述されている。
- (17) 書き込みは以下の箇所にあった。2 頁 24 行目-3 頁 2 行目、3 頁 20-29 行目、5 頁 22-24 行目、6 頁 31 行目-7 頁 14 行目、7 頁 28 行目-8 頁 13 行目、8 頁 16 行目-9 頁 9 行目、10 頁 7-30 行目、11 頁 7-30 行目、11 頁 23-33 行目、12 頁 12-24 行目、13 頁 24 行目-14 頁 4 行目、17 頁 23-26 行目、17 頁 29-35 行目、26 頁 1-6 行目、26 頁 14-16 行目、27 頁 11-31 行目、27 頁 33 行目-28 頁 8 行目、33 頁 14-25 行目、33 頁 25-33 行目、34 頁 15-29 行目、36 頁 15 行目-37 頁 20 行目、36 頁 22-30 行目、38 頁 17-33 行目、39 頁 15-28 行目、40 頁 1 行目-41 頁 15 行目、93 頁 9-15 行目、138 頁 17-25 行目、203 頁 18 行目-204 頁 7 行目、213 頁 3-15 行目、223 頁 18-28 行目（下線ないし頁脇に縦線）。
- (18) 注 (12) 鈴木論文参照。
- (19) 拙論「*The Modern Series of English Literature* について」(『芥川龍之介研究』2014・7) 参照。また、「骨董羹」(『人間』1920・4) に「妖婆」というよく知られた項目がある。「英語に witch と唱ふるもの、大むねは妖婆と翻訳すれど、年少美貌のウイツチ亦決して少しとは云ふべからず。メレジュウコウスキイが「先覚者」ダンヌンツイオが「ジヨリオの娘」或は遙に品下がれどクロフオオドが Witch of Prague など、顔玉の如きウイツチを描きしもの、尋ぬれば猶多かるべし。されど白髪蒼顔のウイツチの如く、活躍せる性格少きは否み難き事実ならんか。スコット、ホオソオンが昔は問はず、近代の英米文学中、妖婆を描きて出色なるものは、キツプ

リングが *The Courting of Dinah Shadd* の如き、或は随一とも称すべき乎。ハアデイが小説にも、妖婆に材を取る事珍らしからず。名高き *Under the Greenwood* の中なる、エリザベス・エンダアフィルドもこの類なり」。これも、*The Supernatural in Modern English Fiction* の 149-153 頁の要約に近い。わずかに「メレジュウコウスキイが「先覚者」」の名だけが見られず、芥川の知見によるものと判断される。

(さわにし ゆうすけ・別府大学講師)